



《 “神聖かまってちゃん”も“SEKAI NO OWARI”もお互いにいまやっている音楽性はちがうものの、出発点は同じ／彼らはファンタジーに舵を切る／“SEKAI NO OWARI”はバンドなのにファンタジーを選択／“神聖かまってちゃん”はロマンを描き始めた／ボーカロイド望感が漂っている／／／ロックって何／ 》

神聖かまってちゃんとSEKAI NO OWARI

———同じものを持って別の戦い方をするケモノ

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！

これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。。

音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、

20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。

今回は、「SEKAINOOWARI」（セカイノオワリ）を軸に、神聖かまってちゃんについて語っていきます。

神聖かまってちゃんとSEKAI NO OWARI

同じものを持って別の戦い方をするケモノ

「トイレにまで監視カメラが入ってる精神病棟にいた」

とFukaseは過去のインタビューで語っていた。

アルバム「EARTH」を発売した後だろうか。まだ“SEKAI NO OWARI”が《世界の終わり》で、Fukaseが深瀬慧という表記だった。

彼らは、二〇〇七年にバンド結成。二〇一〇年二月にファーストシングル「幻の命」をタワーレコード限定でリリース。



二〇一一年、トイズファクトリー〈ミスチルが代表格〉からメジャーデビューした。↓

彼らはしばしばファンタジーと評される。それはライブ演出はもちろん、曲や歌詞のなかでもみてとることができる。



バンドは本来、ロマンは歌うがファンタジーは歌わない。

なぜなら、バンドは民衆に現実を想起させてやろうとあんやくしているテロ集団だからだ。アイドルはファンタジーを民衆に提供する。「夢は叶うよ！」「がんばれば必ず報われるよ！」「私は処女だよ！」と、全存在を使って表現するのが彼ら彼女らの使命だ。

それに対して、「そんなもんじゃねえだろ？」と現実と叩きつけるのがバンドだ。そして現実を踏まえたうえでロマンを語る。

“SEKAI NO OWARI”はバンドなのにファンタジーを選択した。↓

“SEKAI NO OWARI”はバンドなのにファンタジーを選択した

。

彼らはそれを忍ばせるわけでもライブのMCで言うでもなく、徹底的にビジュアルとライブの演出で分かりやすくリスナーに提示していく。

二〇一三年に行われた野外ライブ『炎と森のカーニバル』で、マスメディアも大きく取り上げるほどのファンタジーをブチ上げた。↓

二〇一三年に行われた野外ライブ『炎と森のカーニバル』で、マスメディアも大きく取り上げるほどのファンタジーをブチ上げた。

空き地に三〇メートルの巨大な木のセットが建てられていて、その下にステージが組まれているのだ。さらに、それを森のように覆う木がある。とにかくでかい。その巨大な木には電飾が組み込まれ、ウォータースクリーンというものの仕込まれているらしい。下からは炎が吹き上がり、何十ものレーザーが飛ぶ。なんだか無茶苦茶だ。



ピアノのSaoriはブログで、このイベントの総制作費は五億円と書いていた。完全に赤字らしい。これは彼らの覚悟だ。↓

このイベントの総制作費は五億円と書いていた。完全に赤字らしい。

これは彼らの覚悟だ。

赤字であるという以前に、いま日本でバンドが五億円使って大赤字を抱えてでもやりたいことをやるという、そういう無茶をだれがやろうというのか。

曲を作るときトラブルがあつて苦悩があつてというミュージシャンの自分悩みの話はたくさんみるが、リスナーを面白がらせるために一五メートルの木に満足できなくて三〇メートルに作り直して、ウォータースクリーンと炎とレーザー使って5億円かけてしまったなんていう話は知らない。リスナーのことを考えているのは彼らの方ではないか。

現に、会場ではカメラや写メで会場やステージが取り放題という。↓

ライブが始まってメンバーが出てきても自由にステージの写真を撮っていい。会場ではカメラや写メで会場やステージが取り放題という。これも最近ほとんど聞いたことがない。

マナーとか、ネタばれとか、肖像権とか、日本にはいろんな制約やルールがあって、会場内ましてやステージやメンバーの写真を撮るなんてもってのほかというのが当たり前前のルールだ。



彼らのライブは自由なのである。記念写真にして友達に送ったり、ラインやツイッターやブログにアップしていいのだ。

ロックバンドが「みんな、自由だぜ」と言っても、彼らがこうも写真撮影を解禁してしまっ
ては、↓

ロックバンドが「みんな、自由だぜ」と言っても、彼らがこうも写真撮影を解禁してしまっただけは、「自由」なんて言葉を使っている自分が恥ずかしくなって何も言うことができなくなる。

彼ら“SEKAI NO OWARI”はファンタジーというギミックを使って、うまく音楽シーンの既存のルールをぶち壊しにかかっている。

既存のルールをぶち壊しにってるのは“神聖かまってちゃん”も同じだ。↓

既存のルールをぶち壊しにいつてるのは“神聖かまってちゃん”も同じだ。彼らはネット配信によってマスメディアに頼らない新しい音楽活動のモデルを提示した。作られた楽曲はCD化なんて待たずにたちまちネットにアップロードしてしまう。彼らは現実を想起させるため“SEKAI NO OWARI”とは真逆をいつている。

《夕方のピアノ》という楽曲では「死ね！」という刺激的な歌詞をいつているからだ。

これはまぎれもなく現実を想起させる言葉だ。彼らの楽曲には憂鬱さや鬱屈した現実の匂いがつきまとう楽曲が多い。

かつて、“SEKAI NO OWARI”もそうだった。↓

かつて、“SEKAI NO OWARI”もそうだった。

デビュー曲《幻の命》では墮胎をイメージさせる言葉が並ぶ。

「白い病院で死んだ幻の命に／白い病院で死んだ／僕達の子供は もうこの世界にはいないのに」

と歌われる。

初期の神聖かまってちゃんにも通ずる鬱屈したドロツとした現実の匂いがそこにあった。

メジャーデビューのタイミングで彼らはファンタジーに舵を切る。↓

メジャーデビューのタイミングで彼らはファンタジーに舵を切る。そしてキラークエーンの《スターライトパレード》を世の中に出す。二〇一三年の国立代々木競技場第一体育館のライブで彼らは自分たちがこれからどんな方向に行くのか決定づける。



開演前、ファミコン風にデザインされたメンバー四人のキャラとテロップの解説で、バンドの歩みを振り返る映像が映し出されていく。↓

開演前、ファミコン風にデザインされたメンバー四人のキャラとテロップの解説で、バンドの歩みを振り返る映像が映し出されていく。

「僕ららしくって何だろう？」「いつの間にか音楽は仕事になっちゃってたんだなあ」と、メジャーに至った自分たちの葛藤を映し出す。そして「僕ららしくってというのは、僕らが作ってくものじゃないか」「過去の自分を殺すんだ！」と

、Fukase／Nakajin／Saori／DJ LOVEがそれぞれ「過去の自分」に鉋を打ち込まれる。

そして、返り血で染まった白い衣装で実際に舞台に現れた四人。

「みなさんこんばんは！ SEKAI NO OWARIです！」というNakajinのコールとともに突入した《スターライトパレード》↓

インタビューで彼らは、ライブの演出のために曲を演奏しているという趣旨の発言をしている。音楽をシコシコ作ってるだけではバンドはもうだめなのだという今の時代を表すような言葉だ。

他にも、バンドの形をとっていることで自分たちの活動が制限されてる不自由さを感じていると音楽ライターの鹿野淳は聞いたとっている。

彼らはロックバンドが現代のリスナー（一〇代の熱心ではない音楽リスナー）のニーズにまったく答えられていないことを理解していた。従来のバンドと同じことをやっていたはいけないと思ってファンタジーにいき切ったのだと想う。

“神聖かまってちゃん”も過去のストック曲を詰め込ん↓

“神聖かまってちゃん”も過去のストック曲を詰め込んだ二枚のアルバム『つまんね』と『みんなしね』を出したあと、それまでのドロドロとした鬱屈したものはちがうほうへいく。↓

その後のアルバムに収録されている《夕暮れメモライザ》では

「落ちてるひまもない／諦めなよ それでも僕、少し寂しいからやってみるよここから
さ／生きることはなんか苦しいからエロビデオ見せてくれ／夕暮れの空が綺麗だ諦めな
いよ」

と、絶望から前を向き始めている様子が描かれる。

主人公は一步踏み出す意志をみせている。

“神聖かまってちゃん”はロマンを描き始めた。↓

主人公は一步踏み出す意志をみせている。

“神聖かまってちゃん”はロマンを描き始めた。

それには理由があると想う。

〇〇年代後期からボーカロイドが中高生から熱狂的な人気を得ていた。特徴的なのは歌詞である。どこか絶望感が漂っているのだ。そのことから考えるに、ロックバンドが少年少女たちに受けなくなったのは彼らの絶望をちっとも歌わなかったからである。

“神聖かまってちゃん”はそれを理解していた。だから彼らは絶望を歌う。そして、二枚のアルバムの後は、楽曲は絶望の現状にロマンを加えて、リスナーに先の風景もみせようとしていた。



“神聖かまってちゃん”も“SEKAI NO OWARI”もお互い↓

“神聖かまってちゃん”も“SEKAI NO OWARI”もお互いにいまやっている音楽性はちがうものの、出発点は同じだ。

二つは似たバンドである。どちらも、現実を想起させる楽曲でロックテロを行っていた。

その後、“SEKAI NO OWARI”は夢に即したファ↓

どちらも、現実を想起させる楽曲でロックテロを行っていた。

その後、“SEKAI NO OWARI”は夢に即したファンタジーに行き、“神聖かまってちゃん”は現実に即したロマンに行く。

どちらが好きかはもはや好みであるが、現実なんてクソばっか人間なんてカスばっかもう全部消えてなくなっちまえ夢が叶うなんて嘘っばちだもういやだぜんぶいやだなんて想ってる人間のわたしは、神聖かまってちゃんの《夕暮れメモライザ》を聴いて今日も友人のいない学校へ行くのです。↓

うおお

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/86670>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ